パステルの龍

芥川龍之介

これは上海(シャンハイ)滞在中、病間に訳したものである。シムボリズムからイマジズムに移つて行つた、英仏の詩の変遷は、この二人の女詩人の作にも、多少は窺(うかが)ふ事が出来るかも知れない。名高いゴオテイエの娘さんは、カテユウル・マンデスと別れた後、Tin-tun-Lingと云ふ支那人に支那語を習つたさうである。が、李太白(りたいはく)や杜少陵(とせうりやう)の訳詩を見ても、訳詩とはどうも受け取れない。まづ八分までは女史自身の創作と心得て然るべきであらう。ユニス・テイツチエンズはずつと新しい。これは実際支那の土を踏んだ、現存の亜米利加(アメリカ)婦人である。日本ではエミイ・ロオウエル女史が有名だが、テイツ

チエンズ女史も庸才ではない。女史の本は二冊ある。これは一九一七年に出た、二冊目の PROFILES FROM CHINA から訳した。訳はいづれも自由訳である。

月光

——Judith Gautier——

満月は水より出で、
海は銀（しろがね）の板となりぬ。
小舟には、人々盞（さかづき）を干し、

月明りの雲、かそけきを見る。
山の上に漂（ただよ）ふ雲。

人々あるひは云ふ、——
皇帝の白衣の后（きさき）と、
あるひは云ふ、——
天翔（あまかけ）る鵠（くぐひ）のむれと。

陶器（すゑもの）の亭（ちん）

——同上——

人工の 湖（みづうみ） のなか
緑と青と、 陶器（すゑもの）の亭（ちん）一つ。
かよひぢは 碧玉（へきぎよく） の橋なり。
橋の反（そ）り、 虎の背に似つ。

亭中に、 綵衣（さいい）の人ら。
涼しき酒、 盃（さかづき） に干し。
物語り又は詩つくる、
高々と袖かかげつつ、
のけ様（ざま）に帽頂（かづ）きつつ。

水のなか、
明かにうつれる橋は
碧玉の三日の月めき、
綵衣(さいい)の人ら
逆様(さかさま)に酒のめる見ゆ、
陶器の亭のもなかに。

夕明り

—— Eunice Tietjens ——

乾いた秋の木の葉の上に、 雨がぱらぱら落ちるやう

だ。美しい狐の娘さんたちが、小さな足音をさせて行くのは。

酒落者（しやれもの）

――同上――

彼は緑の絹の服を着ながら、さもえらさうに歩いてゐる。彼の二枚の上着には、毛皮の縁がとつてある。彼の天鵞絨（びろうど）の靴の上には、褲子（くうづ）の裾を巻きつけた、意気な踝（くるぶし）が動いてゐる。ちらちらちらと愉快さうに。

彼の爪は非常に長い。

朱君は全然流行の鏡とも云ふべき姿である！

その華奢(きやしや)な片手には、——これが最後の御定(おきま)りだが、——竹の鳥籠がぶらついてゐる。その中には小さい茶色の鳥が、何時でも驚いたやうな顔をしてゐる。

朱君は寛濶(かんくわつ)な微笑を浮べる。流行と優しい心、と、この二つを二つながら、満足させた人の微笑である。鳥も外出が必要ではないか？

作詩術

——同上——

二人の宮人は彼の前に、石竹（せきちく）の花の色に似た、絹の屏風を開いてゐる。一人の嬪妃（ひんき）は跪（ひざまづ）きながら、彼の硯を守つてゐる。その時泥酔した李太白（りたいはく）は、天上一片の月に寄せる、激越な詩を屏風に書いた。

（大正十一年一月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。